

社、二〇一〇年)や、同じく『真宗儀礼の今昔』(永田文昌堂、二〇〇一年)のほか、多数の論文などがある。本書は待望の著書である。

早速、内容を紹介していきたい。

まず、序章「中世真宗儀礼へのアプローチ―本書の視点と構成―」で本書の前提が示される。

真宗に限らず、近代以降、儀礼を軽視する傾向が一部でみられる。しかし、親鸞は儀礼について十分な知識と経験をもち、それを決して軽んじてはいなかったと指摘している。覚如や蓮如の儀礼観に言及しつつ、真宗史において儀礼研究を軽視できないことを示している。さらに、儀礼は現在につながるものでありつつも、時代によって変化しているとし、現代的な先入観を排除して、中世のありようを論じるとされている。

以下、二部構成である。第一部「中世における真宗儀礼の歴史の変遷とその堂空間」では、本願寺(大谷廟堂)における儀礼とその空間を取り上げている。第一章「初期本願寺における儀礼―覚如を中心として―」では、本願寺で覚如が行っていた

山田雅教著

『中世真宗の儀礼と空間』

黒田 義道

本書は中世真宗の儀礼をテーマとした、おそらく初めての歴史学的研究書である。

著者、山田雅教氏は、本願寺史料研究所や浄土真宗本願寺派教学研究研究所(現・同派総合研究所)などで研究に従事してこられた。真宗僧侶でもあり、教義についても深い造詣をお持ちである。これまで、共著『増補改訂 本願寺史』第一巻(本願寺出版

儀礼を具体的に論じる。この時期の儀礼は、『報恩講私記』などの独自性もあるとはいえ、全体としては法然門下に共通する儀礼が行われていたとする。

第二章「覚如における声明観形成の背景」は、声明を「入宗の方便」「結縁分」とする覚如の声明観形成の背景を論じる。この声明観は「声、仏事をなす」、つまり声が衆生を教化するという見方がベースになっている。この見方は天台声明に共有されており、覚如は声明の修学を通してこれを身につけたとする。一方で声明を仏果に至る因とはしない点に、真宗の独自性があると論じている。

さて、本願寺の儀礼は蓮如を画期としていられる。第三章「儀礼空間としての山科本願寺」では、蓮如建立の山科本願寺における儀礼が具体的に示されている。儀礼はそれが行われる空間によって印象が大きく変わる。本章では、まず阿弥陀堂と御影堂の空間構成、礼拝対象となる諸尊の配置状況などを検討し、さらにそこで行われた種々の儀礼の実態を明らかにしている。

続く第四章「弥陀と御影―中世念仏者の信仰意識と堂空間―」では、真宗各派の本

山で、阿弥陀堂よりも親鸞の肖像(御影)を安置する御影堂が大きい理由を、両堂の性格の違いに求めている。山科本願寺において、御影堂は時代を超えて親鸞と面授して教えを受け、信心を得る場であり、阿弥陀堂はそのよこごびを念仏することであらわす場であったと論じる。真宗の信仰上、重要なことは、阿弥陀仏の本願を聴聞し、他力の信心を得ることである。親鸞から聞法する場として、御影堂が重視されたとする。

第二部「中世真宗の儀礼空間を荘厳する礼拝対象掛け軸」では、中世の真宗で用いられた、礼拝の対象について考察されている。これを検討する際、親鸞在世中に制作された、愛知異妙源寺本光明本尊(真宗曼荼羅)を念頭に置く必要がある。これは三幅からなり、中央に九字名号、向かって左幅に天竺・震旦、右幅に聖徳太子と和朝の高僧先徳の肖像を、それぞれ連坐で配するものである。

真宗で用いられた多様な掛け軸の本尊のうち、まず第五章「中世後期における佛光寺と本願寺の名号観―光明本尊と无导光本尊、そして六字名号―」で名号を中心とし

た本尊を考察している。具体的には主に佛光寺で用いられた光明本尊(本章では名号部分に焦点を絞る)、蓮如の无导光本尊、草書六字名号を取り上げ、思想背景や名号観を読み解いている。光明本尊(佛光寺)と、无导光本尊授与期の蓮如の名号観は、ともに「阿弥陀仏」を解説する仏身観中心のもので、存覚の影響を指摘する。蓮如は寛正の法難(一四六五年)の後、无导光本尊から草書六字名号の授与に路線変更し、「帰命」「南無」を説明する独自の六字釈を示し、そこに描かれない光明の撰取を説いた。さらに、光明への言及が減り、機法一体の説示が増えた理由を、光明を描く阿弥陀如来絵像増加への対応と推測している。

第六章「中世の真宗における和朝の連坐像」では和朝の高僧先徳を描く連坐像が取り上げられる。このうち、聖徳太子を描く連坐像は、讚銘や法然の座具について、妙源寺本光明本尊右幅を継承していないことを指摘し、通規の光明本尊とともに、妙源寺本以外の祖本が存在した可能性を指摘している。太子を描かない連坐像は、次第相承を画面の上から下へと明確にする図様となっているが、太子を描く連坐像や光明本

尊には親鸞以降の相承を示す意識は希薄であるとする。光明本尊を用いた佛光寺は絵系図によって次第相承を横に表現したのに対抗し、本願寺では太子を描かない連坐像で、相承を縦に示したとする。

続く第七章「中世の真宗における天竺・震旦の連坐像」で、妙源寺本光明本尊の左幅に相当する、天竺・震旦高僧連坐像が検討される。天竺部の勢至菩薩の像容について岡山県木山寺藏「遣迎二尊十王十仏図」に由来を求め、震旦部の高僧の人選について、京都二尊院藏「浄土五祖像」と親鸞『唯信鈔文意』の影響と推測するなどしている。

第八章「光明本尊の成立背景」では光明本尊に、法然伝『本朝祖師伝記絵詞（伝法絵）』を著した湛空もしくはその弟子たちが影響している可能性があると論じる。その検討を通して、門徒のなかにみられる密教的背景にも考慮すべきことを示している。

以上の論述を経て、終章「豊穰な中世の真宗儀礼」で、本書の成果を確認しつつ、阿弥陀堂と御影堂の近世への展開や、了源『算頭録』にみられる佛光寺の儀礼に言及

している。

儀礼を持たない宗教は存在しない。儀礼の研究は、宗教の研究において必須であるが、真宗儀礼の歴史的事態の解明は、近代以降の軽視の傾向、現実問題としての史料不足に阻まれ、残されてきた。もちろん、念仏論などの儀礼にも関連する教義学的事項の研究は、すでに精緻を極めている。しかし、それは儀礼の実態に注目したのではない。山田氏は文字史料は当然のこと、建築史や美術史の史料も博搜して論述を展開し、中世真宗儀礼の実態に迫り、今後の研究の方向を示唆する、興味深い推論も提示している。

本書は、今後の真宗儀礼史研究の基準となり、また中世真宗教学史の研究にあたって、参照すべき一冊である。

（くろだ・よしみち 京都女子大学発達教育学部教授）

（A5判、三八〇ページ、六八二〇円、法蔵館、二〇二一・一一刊）